第１章　要請の背景

ジョルダン・ハシェミット王国（以下「ジョ」国とする）はアラビア半島の付け根に位置し、西はイスラエル、北はシリア、北東部はイラク、東はサウディ・アラビアと国境を接し、南に海への出口であるアカバ港がある。人口は491.3万人(2000年)でパレスチナ人、ヴェドウィン系ジョルダン人が居住し、国土面積は892.1万haで、その大部分が砂漠のイスラム教国家である。

「ジョ」国は、産業振興のために必要な電力、運輸等のインフラは比較的よく整備されているものの、国土の 95%が砂漠に占められており、水も不足がちで産業の発展に支障をきたしている。主要産業は、燐鉱石を中心とした鉱業であるが、人口の 30%が貧困層であり、1997 年の一人当たりの GDP は 1,520 ドルと低水準で、主として湾岸産油国からの援助、出稼ぎ労働者の送金、観光収入などによって、国際収支の赤字を補填する構造となっている。農業部門は、水資源の制約もあり、GDP 比率（3%）、就業人口比率(12%)とも低い水準にある。工業部門においてもリンやカリの生産及び関連産業、繊維産業等の今後の発展が期待されるものの現在のところ未成熟であり、このため同国政府は新投資法の導入や工業団地の建設、フリーゾーン計画等を策定し、産業の育成に取り組んでいる。観光産業は外貨獲得上も重要で、今後とも発展が期待されている。水資源については、絶対量の不足に加えて、上下水道の運営管理の非効率や施設の維持管理不備が問題となっている。なお、同国唯一の港を有するアカバ地域は、中継貿易基地、工場誘致地区、観光拠点であり、同国政府は重点地域として開発を進めている。

「ジョ」国土の約90%が年間降水量200㎜以下の半乾燥地帯に属することから、可耕地（耕作が可能な地域）は25.5万ha(FAO Yearbook 1998)で国土面積の約2.9%と極めて少ない。主な食用作物の生産地は、ある程度の降雨量を有するジョルダン渓谷の東、シリア国境から南部にかけて細長く広がる高原地帯であり、ここでは、天水による穀物・豆類の栽培及び換金性の高い野菜・果樹の栽培が盛んである。その他の地域では、牧畜以外に目立った農業活動は行われていない。このため主食である小麦の生産量は1998年には国内需要57.9万ｔの9.5%である5.5万tに過ぎず、1999年には穀物類を169.4万t輸入している。

かかる状況下、「ジョ」国政府は食糧自給率の向上を目指して農産物の増産に励んでいるが、厳しい農業生産環境における限られた耕地面積に加え、年間人口増加率が4.8%（World Bank Atlas 1999）と高く、食糧自給は年々困難な状況になっている。また、農産物生産の最大の制約要因である限られた灌漑用水は、現金収入が期待できる野菜や果樹の栽培に使用されることが多いため、主要食糧作物である小麦、ジャガイモ、レンズ豆等については天水条件下で栽培せざるを得ない状況にある。このため、我が国は、「ジョ」国政府が天水条件下で効率的に食糧増産を行うために必要な農業生産資機材（肥料・農機・車輌・建機）を調達するための資金援助として食糧増産援助を実施してきた。

しかしながら、同国に対する食糧増産援助は1993(平成5)年度から1997(平成9)年度の5年間にわたり実施されてきたが、1997年11月の現地調査により、過去に2KRにより調達した肥料及び乗用ﾄﾗｸﾀｰが多量に売れ残っていたことが判明したため、1998(平成10)年度以降は中断されている。よって、本年度（平成12年度）は「ジョ」国より要請書は提出されていない。